

新名誉会員のご紹介

令和8年度通常総会において、本会名誉会員に次の3名の方が承認されました。

いしかわ ともひさ
石川 智久

石川智久先生は、1984年に東京理科大学薬学部を卒業後、1989年に筑波大学大学院医学研究科で医学博士を取得されました。筑波大学基礎医学系講師、米国ネバダ大学医学部生理学教室留学を経て、1998年に静岡県立大学薬学部助教授に就任し、2006年からは同教授として、薬理学の研究と教育に尽力されました。筑波大学時代には、CGRPによる心筋や血管の神経性調節を解明するとともに、エンドセリン発見の薬理的解析を主導しました。また、ネバダ大学では、パッチクランプ法を用いた血管平滑筋細胞イオンチャネルの薬理的解析に従事しました。静岡県立大学着任後は、代謝系薬理学を研究の中心に据え、膵β細胞のインスリン分泌調節や肝線維化の制御など、独自の視点で優れた研究成果を挙げておられます。日本薬理学会では、第145回関東部会長や理事、研究推進委員長を歴任し、薬理学会パンフレット「薬理学へのいざない ～くすりのしくみをしよう～」の作成を主導するなど、学会の発展と薬理学の普及に多大な貢献をされています。

<文責：金子 雪子>



いまい ゆみこ
今井 由美子

今井由美子先生は、1985年に昭和大学医学部を卒業後、1992年に同大学大学院にて医学博士号を取得されました。小児科・新生児医療・集中治療の臨床を基盤とし、国立成育医療研究センターでの研究を経て、トロント大学医学部呼吸・集中治療科およびオーストリア分子生物学研究所(IMBA)に留学され、分子から個体レベルに至る病態理解の基盤を確立されました。

帰国後は、秋田大学大学院医学系研究科薬理学講座教授、国立医薬基盤・健康・栄養研究所プロジェクトリーダー、大阪大学蛋白質研究所特任教授を歴任され、現在は医療法人徳洲会 湘南鎌倉病院先端医学研究所 主席研究員として、基礎と臨床を融合した未病研究を推進されています。この間、ウイルス感染症の分子病態解明と創薬・診断法開発において先駆的な成果を挙げられ、SARS-CoV受容体ACE2の同定やH5N1インフルエンザの重症化機構の解明などに貢献されました。近年は、オミクスデータと診療情報を統合したデータ駆動型解析により、感染症の重症化予測モデル構築にも取り組まれています。

また、日本薬理学会理事・年会長(第97回)をはじめ、国際薬理学・臨床薬理学連合(IUPHAR)委員、日本学術会議会員として学術および国際連携に貢献されてきました。これらの業績により第16回江橋節郎賞を受賞されています。

以上のように、今井由美子先生は薬理学および関連分野の発展に多大な貢献を果たしてこられた、我が国を代表する研究者の一人です。

<文責：日比野 浩>



たなか ひかる
田中 光

田中光先生は、1983年に東京大学薬学部を卒業後、同大学大学院薬学系研究科に進学され、1988年に薬学博士の学位を取得されました。その後、国立精神・神経センター神経研究所において流動研究員として研鑽を積まれ、1991年に東邦大学薬学部薬物学教室に講師として着任、1997年に同教室助教授、2007年に同教室教授に就任されました。田中光先生は一貫して心筋研究に携わり、心筋の興奮収縮機構の多様性および薬物応答性との関連について、電気生理学的手法やバイオイメージング手法を駆使し、数多くの学術的知見を築き上げられました。さらに、その成果を基盤として、各種循環器疾患に対する薬物選択や創薬につながる研究へと発展させるなど、当該分野の進展に大きく寄与されました。田中光先生のもとで研鑽を積んだ学生・大学院生は、在学中に多数の論文発表および学会発表を行い、卒業後は大学教授、企業研究者、公務員、薬剤師等として広く社会に貢献しています。日本薬理学会では学術評議員を34年間務め、編集委員会委員および広報委員会委員を合計6期11年間にわたり歴任されました。また、第148回関東部会部会長を務められるなど、40年余にわたり本学会の発展に多大なる貢献をされました。

<文責：高原章>

